

関西学院大学 研究成果報告

2026 年 5 月 11 日

関西学院 院長殿

所属：文 学 部
職名：教 授
氏名：村山 功光

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☐ 関西学院留学 長期（滞在国： ） ☒ 関西学院留学 短期（滞在国：ドイツ） ☐ 宣教師研究期間 ☐ 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	グリム兄弟の思想の文化学的研究
研究実施場所	ベルリン・フンボルト大学（Humboldt-Universität zu Berlin）
研究期間	2025 年 10 月 1 日 ～ 2026 年 3 月 31 日（6 ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

2025年10月1日から2026年3月31日までの6ヶ月間、学院留学制度（短期）を利用し、ベルリンに滞在して研究活動を行った。受け入れ機関のフンボルト大学では、ドイツ文学科のSteffen Martus教授と月に2回の割合で研究について議論・打ち合わせを行ったほか、同大学のグリム兄弟書簡編集部のBerthold Friemel氏とグリム研究および書簡集編纂について詳細に話し合うことができた。

さらに、グリム兄弟の研究方法を綿密な資料調査・分析を通じて解明したPhilip Kraut氏（フンボルト大学研究員）の知己を得て、ベルリンのグリム兄弟関係資料の所蔵状況を知ることができた。特に、Kraut氏と共に旧東独ベルリン州立図書館（Staatsbibliothek Unter den Linden）を訪れ、氏の解説を聞きつつグリム兄弟の手稿草稿および書き込み入り蔵書を閲覧できたことは貴重な体験だった。もっぱら活字化された文献を基に研究してきた者にとって、現物に触れる経験は校訂・編集者の恣意的介在を再考する機会となった。

また、グリム兄弟が用いる〈植物メタファー〉の背景を知るため、ベルリン植物園、ドイツ造園図書館（ベルリン工科大学付属）に問い合わせ、造園図書館のClemens Alexander Wimmer氏と連絡を取り合った。氏はこの分野の第一人者で、18・19世紀における植物学・園芸の実態についての私の質問に逐一真摯に答えてくれた。とりわけ、品種改良（人工）による八重咲の花が、園芸界では歓迎される一方で植物学においては自然（神）から逸脱したものとして否定的に扱われていたことについて、リンネ、ルソーの著作を基に教示を受けた。

これは、ベルリンで執筆した後述論文の一部の重要な論拠となり、非常に助けられた。

今回の短期留学の目的の一つは、数年来のテーマであるグリム兄弟の〈イメージ的思考〉研究の一環として、彼らの用いるメタファー（鉄、花、ゾウ）が1800年期の科学技術・学術論争の成果から養分を得ていることを明らかにし、論文にまとめることであった。すなわち、鉄＝戦争・産業革命の弊害、花＝人工的品種改良による自然の墮落、ゾウ＝マンモスなどの古生物学・考古学的発掘から前近代文学遺産の発掘への連想、というように、兄弟の一見〈ロマン主義的〉連想は、実は同時代の科学・思想と密接に結びついているのだ。一見保守的・復古的なグリム兄弟の民間伝承・中世文学への愛着が未来志向の近代批判に発していること、また、大航海時代以来の〈地表〉を踏査する欲望から、18世紀には〈地下〉に根源的自然・無意識を発掘する眼差しへとパラダイム転換が起こり、その流れの中にグリム兄弟の文学も位置したことを論証した。Martus教授との議論からは毎回新たな知的刺激を受け、その都度私の研究の方向性をチェックすることができた。また、この研究のために大学図書館およびベルリン州立図書館で、日本では容易に入手できない資料をも集めることができ、文献調査は大いにはかどった。

その成果は、論文：Eisen – gefüllte Blumen – Elefanten. Das Unbehagen an der Modernisierung bei den Brüdern Grimm（「鉄・八重咲の花・ゾウ：近代化に対するグリム兄弟の不満」）に結実した。この論文は、Martus教授の勧めにより下記学術誌に投稿し、すでに査読を通っている。2026年12月に出版されるJahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft（『ドイツ・シラー協会年鑑』）第70巻に掲載される予定である。

留学のもう一つの目的は、グリム兄弟のポエジー概念・メールヒェン概念を再考し、その文学史的意味・現代的意義を追究することであった。私は今までに発表してきた研究論文を、“Begriffe – Bilder – Bürgerlichkeit. Das moderne Konzept der Brüder Grimm zur Poesie.“（概念・イメージ・市民性：グリム兄弟の近代的ポエジー構想）というタイトルの下にまとめて、将来的に1冊の書籍（ドイツ語）として発表したいと考えている。その第1章の一部として上記の2概念についての論文を計画していたが、偶然にもMartus教授から推挙され、ヘッセン州立城館・庭園管理局（Staatliche Schlösser und Gärten Hessen）が編集・刊行するグリム兄弟記念論集に同テーマの論文を寄稿することになった。そのための準備段階として、2026年9月に2日間にわたってシュタイナウ（Steinau）市で開催されるワークショップに参加して口頭発表を行い、2027年1月には論文原稿を提出する予定である。

書籍化の計画については、ベルリンの学術出版社の編集者と連絡を取った。私の過去の論文の題名をリストアップし、全体の構成および研究の今日的意義をまとめて伝えたところ、多大な関心と肯定的な回答をいただいた。近い将来、ぜひとも実現したいと思う。

また、フランクフルト大学文学部児童文学科を訪問し、Ute Dettmar教授と研究の打ち合わせも行った。Dettmar教授は、私が学生として同大学で博士論文制作していた時（2000年ごろ）からの研究仲間で、長期にわたる交流では折々、最新の研究状況やさまざまなプロジェクト企画の情報を教示していただいている。今後、関西学院大学からフランクフルト大学へ留学生を送り出す仲介役を、私が努められればとも考えている。（以前この計画が進められたが、コロナ禍により中断された。）

このように、学院短期留学ではきわめて密度の高い研究滞在を実現することができた。6ヶ月という短い期間であったからこそ、かえって計画的・集中的に研究に専念することができた。また、東欧・中東の戦争のさなかで、かつ移民との共生問題に揺れるヨーロッパおよびドイツ社会を体験的に内側から見て、さまざまな人々と議論する機会を得たことも貴重であった。私の6ヶ月の経験は、大学での授業等を通じて教育にも活かしていきたい。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間の大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。